

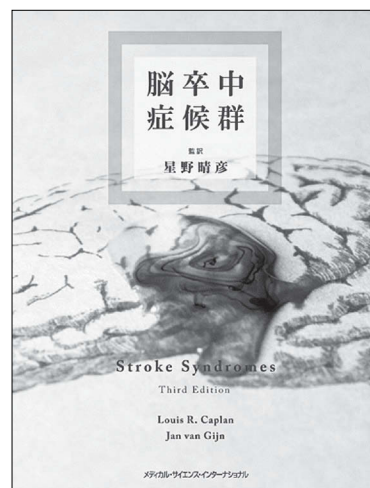
脳卒中症候群

星野晴彦【監訳】

評者

山本康正

社会福祉法人京都桂病院脳神経内科 脳血管センター長



星野先生とその学友の先生方は、L. R. Caplan の『Stroke Syndromes』を邦訳するという大技をやったのけられた。本書はCaplan の多くの著書の中でも最も重要なものの1つである。自ら大いに筆を振るいながら、各領域の第一人者である友人にも依頼された分担執筆で、各著者は渾身の筆致で原稿を書き上げられている。本書が素晴らしいのは、症候学を神経解剖と結びつけるのみならず、その病態、メカニズムの詳細に切り込んでいる点である。英語の原本は手元においてときどき辞書代わりに読んでいるが、母国語になった本書をみるとまるで新しい著作の登場である。頁をめくり一気に飛び込んでくる内容は、母国語の有難味というべきか、身体感覚に響いてくる。何故か図などは原本より色彩が豊富となっており、どこを読みたいのか・どこを読まなければならないのか、一瞬にして教えられるほど鮮明である。

症候学は病巣を推定するという臨床神経学の原点であるが、画像診断の進歩で症候学への関心が薄れてきているのは否めない。しか

し、画像は病態理解の重要な契機であるが、病態の本質は幾重ものカーテンに覆われている。症候が画像とどう結びつくのかを考え、しばしば、画像に現れていない症候に出くわす。いわば画像と症候のミスマッチはいたるところで発生している。神経学的診察とは、病態を探る医師が患者との間に取り交わす絶えざる対話の連続系であるが、その中核が神経症候学である。医師のまなざしは、画像<症候の現場を回旋しながら、らせん状に本質に迫る。

Caplan は MGH で Denny-Brown, Raymond Adams らの指導を受け、特に Miller Fisher の最後のフェローとして最も深い信頼関係を形成された。その著『The Effective Clinical Neurologist』は木村 淳教授の監訳で『患者にやさしい神経科医』(1993年, MEDSi)として邦訳されているが、臨床姿勢は一貫して“個の医学”である。RCT といえども多様な病態を一括したり、一断面だけをとらえた結果は目の前の患者の治療に役立たないと断言する。ガイドラインは料理のレシピであり、料理の上手な人はレシピに頼らないとも。

“Effective neurologist” とは、個々の患者に対し、神経解剖、病理、病態生理、薬理学やその治療効果に対する知識を基盤とし、さらに、患者の経済状況も考慮する neurologist である (AAN 2009 presidential plenary)。筆者は木村 淳教授のご紹介で Caplan 先生のもとで学ぶ機会を得、最近では AHA Stroke に際し毎年訪問している。

本書を手にして、訳者の先生方のご苦労は並大抵のものではないと想像できるが、この書物は単なる翻訳というより、志高い先生方が Caplan を通してわが国の stroke neurology のために新たな記念碑を制作されたのであると実感する。

A4 変・頁 624 2016 年 3 月
定価：本体 12,000 円＋税
[ISBN978-4-89592-845-8]
MEDSi 刊